カイドウ ・・・

４月になると，サクラとバトンタッチするかのように，春の陽光の中で鮮やかな輝きを見せてくれるのがカイドウです。当団地では，光六小との境のフェンス沿いにずらりと並んで，とても目に付く存在として開花期を迎えています。

花がひときわ美しいことから「ハナカイドウ」と称することが多いです。

咲き始めは紅色，開くとピンク色ですごく優しい色合いとなります。その花のつき方に大きな特徴があり，花柄は３～６ｃｍもあって長く，しかも１か所から４～６個の花が垂れ下がります。まるでサクランボの実のような花のつき方で，付け根には小さな若葉が芽生え，まさに緑色のリボンできゅっとしばられているようです。

花言葉は「艶麗（えんれい）」と「温和」の２つがありますが、全体の彩りに目を奪われれば前者となり、下向きに花が咲く様子や自己主張し過ぎない穏やかな色合いからすれば後者ということになるのでしょう。

楊貴妃

俳句の世界では，「睡花」「ねむれる花」として春の季語になっていますが、「睡花」とは，唐の玄宗皇帝が，酔って両脇を支えられ頬を染めた楊貴妃の美しさをカイドウに喩えたからだそうです。もっとも、これが楊貴妃アル中説の根拠にもなっていますが・・・　　。

また、美人の打ち萎れた可憐な様子を「海棠の雨に濡れたる風情」とも言います。いずれにしても、中国では，ボタンと並んで美人の形容詞に使われると聞きましたから納得です。これまで見過ごしていたでしょうから、折りを見て、雨中のカイドウをじっくり観察なさるのも一興でしょう。

ところで、軽井沢のリンゴ農家を訪問した時に教えてもらったのですが，リンゴの木は本来背が高い樹形になるので，管理しやすいように樹形の低いカイドウを台木（接ぎ木の基部）に使っているとのことでした。こちらはおそらく「ミカイドウ」なのでしょう。その時に勧められてカイドウの実を食したのですが，渋くて食べられたものではありませんでした。農家の方の悪戯心に見事に引っかけられました。

中国名「海棠」の語源は分かりませんが，宮城谷昌光の作品に、同じ「棠」の字を用いた「甘棠（かんとう）の人」というのがあります。周の武王に仕えた召公の物語で，彼が甘棠の

木の下でいつも公平な裁判をした故事に由来しています。彼の作品を読むと、中国古代史への見識が深まるのでお薦めです。甘棠の木とは，ヤマナシのことです。